筒井筒

（第二十三段）

要旨

幼なじみの少年少女が密かに恋心を抱き合い、ついに互いに歌で気持ちを確かめ合って結婚した。その後、生活が不如意になって男は高安の女のもとに通うようになるが、女は夫の旅の無事を祈る歌を歌い、男はその誠実さに打たれて、高安に行かなくなった。ごくまれに男が高安に行ってみると、女は自ら器に飯を盛っており、そのくだけた姿に男は幻滅して、結局その女のもとに通わなくなった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P六四・12〈あひにけり。〉	昔、地方官の子供である少年と少女が物心つき、互いに恋心を抱き合い、親たちの勧める結婚話も断って、思いどおり結婚した。
第二	P六四・13〈さて、年ごろ〉〜P六五・5〈行かずなりにけり。〉	結婚後数年たって、男は高安郡に新しい女ができたが、妻が自分を快く出発させるのを不審に思い様子をうかがっていると、旅ゆく夫を気遣っている様子なので、女の真心に打たれ、以後高安の女のもとへは通わなくなった。
第三	P六五・6〈まれまれ〉〜終わり	ごくまれに男が高安の女のもとへ行ってみると、女は自ら器に飯を盛っており、以前とは違うくだけた姿に男は幻滅する。女から度々歌をもらうが、結局その女のもとに通うことはなくなった。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①昔、田舎渡らひ　し　ける　人の　子ども、井の　もと
サ変・用　過・体　格助・体修

に　出で　て　遊び　ける　を、大人に　なり　に　けれ
格助・場所　ダ下二・用　接助・単接　バ四・用　過・体　接助・逆確　格助・変化　ラ四・用　完・用　過・已

ば、男も　女も　恥ぢかはし　て　あり　けれ　ど、男
接助・順理　係助・列挙　係助・列挙　サ四・用　接助・単接　ラ変・用　過・已　接助・逆確

は、この　女を　こそ　得め　と　思ひ　つつ、親の　あはすれ
係助・区別　代　格助・体修　格助・対象　係助・強意(係)　ア下二・未　意・已(結)　格助・引用　八四・用　接助・継続　格助・主格　サ下二・已

ども、聞か　で　なむ　あり　ける。③さて、この　隣の
接助・逆確　カ四・未　接助・打接　係助・強意(係)　ラ変・用　過・体(結)　接　代　格助・体修

男の　もと　より、かく　なむ。
格助・体修　格助・起点　副　係助・強意

④筒井筒　井筒に　かけ　し　まろ　が　丈　過ぎ　に　け
格助・比基　カ下二・用　過・体　代　格助・体修　ガ上二・用　完・用　過・推

らし　な　妹見　ざる　まに
定・終　終助・詠嘆　マ上一・未　打・体　格助・時間

⑤女、返し、

くらべこ　し　振り分け髪　も　肩　過ぎ　ぬ　君　なら　ず
カ変・未　過・体　係助・同類　ガ上二・用　完・終　断・未　打・用

①昔、地方を回って生計を立てていた人の子供たちが、井戸の周りに出て遊んでいたが、大人になってしまったので、男も女も恥ずかしがって（会わずに）いたけれど、男は、この女をぜひ妻にしようと思う。②女は、この男を（夫にしよう）と思い続け、親が（他の男と）結婚させようとするけれども、聞かないでいた。③そうして、この隣の男のもとから、このように（歌を贈ってきた）。

④筒井筒…井戸の井筒の高さと背比べした私の背丈は、井筒を越してしまったらしいなあ、あなたを見ない間に。

⑤女は、返しの歌として、
くらべこし…（あなたと）長さを比べてきた振り分け髪も、肩より長くなってしまった。あなたでなくて誰のために髪上げをしようか（あなた以外の人のためにはしない）。

して　たれ　か　上ぐ　べき
接助・単接　代　係助・反語（係）　ガ下二・終　意・体（結）

など　言ひ　言ひ　て、　つひに　本意　の　ごとく　あひ　に　けり。
副助・引用　八四・用　八四・用　接助・単接　副　格助・体修　比・用　八四・用　完・用　過・終

⑥さて、　年ごろ　経る　ほど　に、　女、　親　なく、　頼り　なく　なる
接　八下二・体　格助・時間　形ク・用　形ク・用　ラ四・体

まま　に、　もろともに　言ふかひなく　て　あら　む　やは　と　て、　河内
連語（名＋格助）　副　形ク・用　接助・単接　ラ変・未　推・終　係助・反語　格助・引用

の国　高安の郡　に、　行き通ふ　所　出で来　に　けり。　⑦さり　けれ
格助・場所　八四・体　接助・単接　カ変・用　完・用　過・終　ラ変・用　過・已

ど、　こ　の　もと　の　女、　悪し　と　思へ　る　気色
接助・逆確　代　格助・体修　格助・体修　形シク・終　格助・引用　八四・已　存・体

も　なく　て、　出だしやり　けれ　ば、　男、　異心　あり　て
係助・同類　形ク・用　接助・単接　ラ四・用　過・已　接助・順理　ラ変・用　接助・単接

かかる　に　や　あら　む　と　思ひ疑ひ　て、　前栽
ラ変・体　断・用　係助・疑問（係）　補動・ラ変・未　推・体（結）　格助・引用　八四・用　接助・単接

の　中　に　隠れゐ　て、　河内　へ　往ぬる　顔　にて　見れ
格助・体修　格助・場所　ワ上一・用　接助・単接　格助・方向　ナ変・体　格助・状態　マ上一・已

ば、　この　女、　いと　よう　化粧じ　て、　うちながめ　て、
接助・順偶　代　格助・体修　副　形ク・用（ウ音）　サ変・用　接助・単接　マ下二・用　接助・単接

⑧風　吹け　ば　沖つ　白浪　たつた山　夜半　に　や　君
カ四・已　接助・順恒　格助・体修　ヤ下二・終　現推・体（結）　格助・時間　係助・疑問（係）

が　ひとり　越ゆ　らむ
格助・主格

などと詠み交しあって、とうとうかねてからの望みどおり結婚した。

⑥そうして、数年たつうちに、女は、親に死なれ、生活のよりどころがなくなるにつれて、（男は、夫婦）そろって貧乏な状態でいられようか（いや、いられない）と思って、河内の国高安の郡に、通って行く所ができてしまった。⑦そうではあったけれども、この昔からの女は、嫌だと思っている様子もなくて、（男を新しい女の所へ）出してやったので、男は、（女は）浮気心があってこのような態度をとるのではあろうかと疑わしく思って、庭の植え込みの中に隠れていて、河内へ行ったふりをして見ていると、この女は、たいそうきれいに化粧をして、物思いにふけって、

⑧風吹けば…風が吹くと沖の白波がたつ、というその名の龍田山を、あの人は夜中に一人で越えているであろうか（どうかご無事で）。

と詠んだのを聞いて、（男は）このう

と　詠み　ける　を　聞き　て、　限りなく　かなし　と　思ひ
格助・引用　マ四・用　過・体　格助・対象　カ四・用　接助・単接　形ク・用　形シク・終　格助・引用　八四・用

て、　河内　へ　も　行か　ず　なり　に　けり。
接助・理由　格助・方向　係助・同類　カ四・未　打・用　ラ四・用　完・用　過・終

⑨まれまれ、　か　の　高安　に　来　て　みれ　ば、　初め
副　代　格助・体修　格助・帰着　カ変・用　接助・単接　マ上一・已　接助・順偶

こそ　心にくく　も　つくり　けれ、　今　は　うちとけ　て、
係助・強意(係)　形ク・用　係助・強意　ラ四・用　過・已(結)　係助・提示　カ下二・用　接助・単接

手づから　飯匙　取り　て、　笥子　の　器物　に　盛り　ける　を
副　ラ四・用　接助・単接　格助・体修　格助・対象　ラ四・用　過・体　格助・対象

見　て、　心憂がり　て、　行か　ず　なり　に　けり。　⑩さり　けれ
マ上一・用　接助・単接　ラ四・用　接助・単接　カ四・未　打・用　ラ四・用　完・用　過・終　ラ変・用　過・已

ば、　か　の　女、大和　の　方　を　見やり　て、
接助・順理　代　格助・体修　格助・体修　格助・対象　ラ四・用　接助・単接

⑪君　が　あたり　見　つつ　を　をら　む　生駒山　雲　な
格助・体修　マ上一・用　接助・継続　間助・強意　ラ変・未　意・終　副

隠し　そ　雨　は　降る　とも
サ四・用　終助・禁止　係助・区別　ラ四・終　接助・逆仮

と　言ひ　て　見出だす　に、　からうじて　大和人、「来　む。」
格助・引用　ハ四・用　接助・単接　サ四・体　接助・単接　副　カ変・未　意・終

と　言へ　り。　⑫喜び　て　待つ　に、　たびたび　過ぎ　ぬれ
格助・引用　ハ四・已　完・終　バ四・用　接助・単接　タ四・体　接助・逆確　副　ガ上二・用　完・已

ば、
接助・順理

えなくいとしいと思って、河内へも行かなくなってしまった。

⑨ごくまれに、あの高安（河内の女の所）に来てみると、（その女は）初めのうちは奥ゆかしく身繕っていたが、今は気を許して、自分の手でしゃもじをとって、飯を盛る器に（飯を）よそっているのを見て、（男は）嫌になって、（女の所に）行かなくなってしまった。⑩そうであったので、その女は、（男のいる）大和の方を見やって、

⑪君があたり…あなたのいる（大和の）辺りを見続けて暮らしましょう。（大和との境の）生駒山を、雲よ、隠してくれるな。たとえ雨が降ったとしても。

と詠んで外の方を見ていると、やっとのことで大和の男が「行こう。」と言った。⑫喜んで待っていたが、度々（男が来ないまま）過ぎてしまったので、

⑬君(きみ)　来(こ)　む　と　言(い)ひ　し　夜(よ)ごと　に　過(す)ぎ　ぬれ　ば
代　カ変・未　意・終　格助・引用　八四・用　過・体　格助・時間　ガ上二・用　完・已　接助・順理

頼(たの)ま　ぬ　ものの　恋(こ)ひ　つつ　ぞ　経(ふ)る
マ四・未　打・体　接助・逆確　八上二・用　接助・継続　係助・強意(係)　八下二・体(結)

男(をとこ)、住(す)ま　ず　なり　に　けり。
マ四・未　打・用　ラ四・用　完・用　過・終

と　言(い)ひ　けれ　ど、
格助・引用　八四・用　過・已　接助・逆確

⑬君来むと…あなたが、行こうと言ったその夜ごとが、むなしく過ぎてしまったので、当てにしていないけれども、あなたのことを恋し続けて暮らしています。

と（女は）歌を詠んだけれども、男は、通ってこなくなってしまった。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶「筒井筒」を音読する。思判表B(1)ア

❷重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウ
→「言葉と表現」1

❸現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技(1)エ 思判表B(1)ア

❹「筒井筒」「くらべこし」の歌に込められた男と女の心情を理解する。知技(2)イ 思判表B(1)イ →「学習のポイント」1

❺「風吹けば」の歌の修辞を確認し、女の心情を理解する。知技(1)アオ・(2)エ 思判表B(1)イ

❻大和の女と高安の女を、詠んだ歌、振る舞いや性格について、比較する。思判表B(1)エ →「学習のポイント」2

❶毎時間の最初には音読をする。授業態勢への導入と考える。単独読み、一斉読みなどさまざまに試みる。和歌は、韻律にも注意させる。また、音読を聞く態度も養わせたい。

【評価】歌を中心とする物語の構成を踏まえて、場面を追って、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷段落ごとに重要古語を確認していく。集落の中で「井」の持っていた意味に注意させる。「筒井」や「井筒」については教科書挿絵を参照させる。「振り分け髪」などは図で解説する。「もろともにいふかひなくてあらむやは」（六四・13）の部分はしっかり押さえさせる。和歌の「な…そ」の用法などに留意させる。助詞では間投助詞の「を」、逆接の「ものの」などを確実に押さえさせる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸現代語訳は内容を把握するために不可欠である。逐語訳にこだわりすぎず、粗筋が分かる程度でもよい。現代語訳プリントなどを用意することで代用することもできる。男と女の贈答歌に注意させ、二人の心情が十分に分かるように工夫する。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・歌を中心とする物語の構成を踏まえて、場面を追って、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、現代語訳により、確認する。

❹「筒井筒」の歌は求婚歌、「くらべこし」の歌はその受諾の返歌になっている。幼なじみの男女がほのかに抱いていた恋心を大人になって成就させたきっかけになった歌である。「筒井筒」や「たけくらべ」が幼なじみの恋の意味で用いられるのはこの物語からである。樋口一葉の小説の題名などからの話もできよう。「古文の窓3」を参照し、平安時代の恋と結婚について理解を深めさせる。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

・二首の和歌について、表現技巧、男女の心情、また、古人のものの考え方が理解できたか、歌を暗唱させる、感想をノートにまとめさせて発表させることにより、確認する。

❺序詞を用いている。この歌は、女が男の身の上の安否をひたすら気遣う歌である。歌によって男の心を取り戻す、歌徳説話になっている。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・序詞などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているか、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・和歌の表現技巧、女の心情について理解できたか、歌を暗唱させる、感想をノートにまとめさせて発表させることにより、確認する。

❻「風吹けば」「君があたり」「君来むと」の歌に込められたそれぞれの女性の心情を読み取る。

【評価】大和の女と高安の女の行動や歌について、内容の解釈を深めているか、表現技巧、詠まれている心情などの理解を深め十分に鑑賞できたかを、感想をノートにまとめさせ鑑賞文を書かせたり発表させたりすることにより、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶「筒井筒」と「沖つ白浪」を読み比べ、描写や作風の違いを指摘する。主態　→**「言語活動」1**

❶グループを作り、「筒井筒」と「沖つ白波」で描写が違う部分をあげさせる。まず違う点をあげさせて、全体で整理する際に、【両作品にあるが、設定が異なっている描写】【「筒井筒」にはあって、「沖つ白波」にはない描写】【「沖つ白波」にあって、「筒井筒」にはない描写】に分けると、整理しやすい。また、これらの項目を最初から与えてもよいし、始終分けずに出してもらうやり方でもよい。教室や授業の状況に併せて行いたい。課題としてあらかじめ出しておくのもよい。

【評価】粘り強く昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語

題に沿って、同じ和歌を主題とした異なる物語を読み比べよう
に親しみ、内容や構成、叙述を基に人物の心情を考え、学習課

としているか、グループワークにより、分析する。

指導上の注意点と発問例

● 六四ページ

問　**「渡らひ」（2行目）の基本的な意味を述べなさい。**

答　行き来。暮らし向き、なりわい。

問　**「男も女も恥ぢかはして」（4行目）とあるが、「恥ぢかはして」いた理由を説明しなさい。**

答　（お互いに）好き合っていたものの、年頃になった照れくささから。

問　**「この男を」（6〜7行目）「かくなむ」（8行目）の後に、それぞれどのような語句を補ったらよいか。**

答　「この男を」→得む。「かくなむ」→詠みてやりける（言ひやりける）。

補　省略があるときは、常に補って読む習慣をつけさせる。

問　**「親のあはすれども、聞かでなむありける。」（7行目）とは、誰がどうしたというのか。**

答　親が他の男と結婚させようとしたが、女は従わないでいた。

補　古語の「あふ」には「結婚する」という意があることに注意させる。（「語句の研究」参照。）女の強い意志を読み取らせたい。

問　**「さて」（7行目）の品詞を答え、現代語訳**

語句の研究

● 六四ページ

2 田舎渡らひしける人　地方を回って生計を立てている人。地方暮らしの役人、田舎回りの行商人のこととする説がある。「渡らひ」は、動詞「渡る」に上代の反復・継続の助動詞「ふ」が付いた「渡らふ」の名詞化。「行き来」または「暮らし向き、なりわい」のこと。ここは、「髪上げ」などを行う階級ということで、地方官か。

3 井　掘り井戸。集落共有であった。大人たちはここに集まって家事などをし、子供たちもこれについて集まってきた。

4 恥ぢかはして　「かはす」は、「互いに…する」の意を添える補助動詞。

6 この男を　「この男を得む」または「この男をこそ得め」の略。前文を参照する。

7 親のあはすれども　「親が他の男と結婚させようとするけれども」。「の」は主格。「あはす」は「結婚させる」の意。この時代、年頃の女性は男性の前に姿を現したり、顔を見せることは滅多になかった。顔を合わせることはすなわち深い関係であることを意味しており、「あふ」＝「結婚」ということになった。

8 かくなむ　下に「言ひやりける」が省略されている。

9 筒井筒…　「筒井」は筒のように円形に掘り下げた井戸。「井筒」は井戸の地上の部分を木や石などで囲んだ井戸囲い。井げた。「かけ」は一般的には「はかり比べる」の意ととる。「まろがたけ」は「私の背丈」。「まろ」は自称代名詞として、中古では上下・男女・老幼を問わず用いた。「過ぎにけらしな」の「けらし」は「けるらし」の略。「けり」は歌なので詠嘆（気づきの「けり」）。「らし」は、客観的な事実や証拠に基づいて推定する助動詞。「過ぎて（越して）しまったらしいなあ。」と、推量形だが確信をもって言うのである。「妹」は男から女に対して言う親愛の語。自分が成長したことを述べて、遠回しに求婚している。

11 くらべこし…　「くらべこし」の「こ」（「く」の未然形）は「ずっと…してくる」という継続の意を添える補助動詞。「振り分け髪」は左右に分けて肩の辺りで切りそろえた子供の髪型。「たれか上ぐべき」の「上ぐ」は「髪上げをする」ことで、女子

せよ。

問 答 接続詞　そうして

問 答 **「かくなむ」（8行目）「かく」の指すものを答えよ。**

次の「筒井筒」の歌

問 答 **「筒井筒井筒にかけし」（9行目）を現代語で説明せよ。**

井戸の井筒の高さと背比べをした。

問 答 **「まろが丈過ぎにけらしな」とは、男が何を言おうとした言葉か。**

成人して妻を迎える年齢になったこと。

問 答 **「くらべこし」（11行目）とあることから、この少年少女がどのような間柄であったことが分かるか。**

無邪気な「髪の長さの比べ合い」などをして、幼時から互いに親しみ合っていた。

問 答 **「振り分け髪も肩過ぎぬ」（11行目）とは、どのようなことを意味しているか。**

その昔から年月がたち、そろそろ髪上げする、婚期が近づいたことを示している。

問 答 **「上ぐ」を分かりやすく説明せよ。**

補 「語句の研究」参照。

幼なじみの男女の間柄を「たけくらべ」ということがある。背丈や髪を通して、共有している思い出と自分たちの成長をそれぞれ表現している。

問 **「肩過ぎぬ」（11行目）の「ぬ」を文法的に説明せよ。**

補 答 完了の助動詞「ぬ」の終止形。

接続の上からは、打消の助動詞「ず」の連体形と区別がつけられないが、下の「君」にかかってはいないので、連体形でなく終止形であると分かる。終止形ならば完了の助動詞である。男の歌に対し、自分も成長したことを伝えている。

問 答 **「頼りなくなる」（13行目）とは、どのようなことか。**

「頼り」が「なくなる」こと。つまり、頼るべき者（親）が亡くなったこと。

補 現代語の「頼りない」とは異なる。下段「語句の研究」参照。

問 答 **「もろともに」（3行目）は、(1)「女と一緒にいて」と、(2)「女も男も二人とも」の二通りが考えられる。それぞれの場合の「いふかひなくてあらむやは」の現代語訳を答えよ。**

(1)女と一緒にいて、貧乏な暮らしに甘んじてはいられないと思って。(2)頼りない身になるにつれて、二人そろって、何もしないで暮らしていられようか、いやいられないと思って。

問 答 **「行き通ふ所」（14行目）とは、どのような所か。**

男が通う、妻以外のなじみの女（の家）。

の成人儀礼。成年に達した女性は、今までの振り分け髪をやめて結髪し、裳を着用する。「竹取物語」に「よきほどなる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。」（四七・2～4）とある。「髪上げをすべき時期（婚期）が近づいたが、あなた以外の誰のために髪上げをしようか。いや、しない」の意。一説に「古来将来夫たるべき者が許嫁の女子の髪上げをする風があった」（石村貞吉「有職故実」）ともいうが、未詳。その説に従えば、「あなた以外に誰がこの髪を結い上げてくれるでしょうか（それをしてくれるのはあなたのはずです）」の意になる。「か」は反語。男の歌が幼い頃の思い出と成長を詠んでいることに対応した内容であるが、男の歌よりもより積極性が感じられる。

12言ひ言ひて　「詠み交しあって」。このように歌の贈答を続けて機も熟してきて。

13親なく　（女の）親が亡くなって。「源氏物語」梅枝巻にも「親なくて世の中かたほにありとも」という例が見られる。生活の不如意をいう。

13頼りなくなるままに　頼りとする者、特に経済的な援助者がなくなり、「生活が貧し

補 新しい妻の所。

補 うしろに「もとの女」とあるので、これが別の女の所であるとわかる。当時の結婚形態に、男が女の家に通う、いわゆる「通い婚」という形式があった。この場合、夫の面倒は妻の家がみることになる。親を失った妻は夫の面倒を見るのが困難になり、それで夫は別に通う所ができたのである。

● 六五ページ

問 「さりけれど」（1行目）の「さり」とは、何を指しているか。

答 男が別の女のもとへ通うようになったこと。

補 「さり」は副詞の「さ」にラ変動詞が付いた複合動詞「さあり」の転化したもの。

問 「悪しと思へる気色もなく」（1行目）この女が夫を送り出したのはなぜか。

答 夫を愛するあまり、女は自分の夫に対する嫉妬の心を抑えていたから。

補 答は一例であり、自由に話し合わせることもできる。同話を載せる「大和物語」では、女の胸の上に置いた水が、嫉妬でお湯になったという描写がある（「鑑賞」参照）。

問 「異心」（2行目）とは、この場合どのような心か。

答 浮気心。他の男を愛する気持ち。

補 他のことを思う心から転じて、別の異性を思う心の意となる。

くなるにつれて」。親が亡くなったことを言う。「ままに」は「…なくなるにつれて」の意。

13 もろともに言ふかひなくてあらむやは　男の言葉あるいは心中思惟と解釈するのが通説。「この女との貧乏な暮らしに甘んじてはいられない」との気持ちから、男が別の女の所へ通う口実とする説と、「二人で無為のままみっともない暮らしをしているわけにはいかない」との気持ちから、妻に負担をかけないために愛する妻のもとを離れて遠くへ出かける理由と解する説とに分かれる。また、二人一緒にいることが不運のもとだから、それぞれの道を歩むべきだという考え方もあり得る。ここは、愛情が変わらないとする後者の説の方が、後の「異心ありて」と女を疑う気持ちにも通じる。

14 河内の国　現在の大阪府南東部。

14 高安の都　現在の大阪府八尾市の辺り。生駒山地の南。

14 出で来にけり　「出で来」の「来」（「来」）の連用形）は、「…し始める、…してくる」という始まりの意を添える補助動詞。

● 六五ページ

1 悪しと思へる気色　男の態度を不快だと思っている様子。

2 異心ありて　「女に浮気心があって」。妻が他の男と通じているのかと疑っている。

2 かかるにやあらむ　「嫉妬もせず、このように気持ちよく出発させるのであろうか」。

3 往ぬる顔　「往ぬる」はナ行変格活用動詞の連体形。行ったふり。妻の浮気心を確かめようとする。

4 風吹けば…　「風吹けば沖つ白浪」は「たつ」の序詞。「沖つ」の「つ」は上代の連体修飾の格助詞。平安時代以降はその働きは失われ、特定の語にのみ残された。「たつ」は「（波が）立つ」と「龍田山」の「龍」との掛詞。「龍田山」は大和の国から河内の国へ行くときに越える山。これによって最初の男女が住んでいたのは大和の国であることが分かる。また、白浪は「後漢書」の「白波賊」から盗賊を表す語としても使用されたので、「盗賊が出るような龍田山」とする解釈もある。「夜半にや」の「や」は疑問。「越ゆらむ」の「らむ」は現在推量で、視界外のことを推量する。「今頃越えているであろう」の意。夜更けに危険な山道を行く夫の身をひたすら案じる歌である。前半部で繰り返される女の思いの

問 ◉**「かかる」（2行目）とは、どのような内容を指しているか。**

答 「悪しと思へる気色もなく」男を送り出す女の行動。

補 他の女のところに行くと知っていながらの行動なので、男はいぶかしがるのである。

問 **「ながめ」（3行目）のここでの意味は次のどちらか。**

(ア)　はるか遠くを見渡すこと。

(イ)　物思いに沈んでぼんやりと見やること。

答 (イ)

問 **「風吹けば」（4行目）の歌に見られる修辞上の技巧を説明せよ。**

答 序詞・掛詞

補 「語句の研究」参照。

問 **「風吹けば」（4行目）の歌に込められている女の気持ちはどのようなものか。**

答 ひたすらに夫を思い、今は旅にあって危険な夜の山道をも行くであろう夫の身の上を気遣う気持ち。

補 「夜半にや君がひとり越ゆらむ」が、夫を気遣う内容になることに注意させる。

問 **「越ゆらむ」（4行目）の「らむ」を文法的に説明せよ。**

答 現在推量の助動詞「らむ」の連体形。

問 **「かなし」（5行目）に漢字を当てる場合、次のどちらがよりふさわしいか。また、「かなし」の意味を答えよ。**

(ア)悲し・哀し　(イ)愛し

答 いとしい。

問 **「初めこそ心にくくもつくりけれ」（6行目）を現代語訳せよ。**

答 初めのうちは奥ゆかしく振るまっていたが。

問 **男が高安の女に「心憂がりて」（7行目）となったのはなぜか。**

答 高安の女が自分で食事をよそったりするという、当時の女性としては、はしたない振る舞いをするようになったから。

補 男が生活に困って通い出した高安の女はそれなりに裕福だったはずである。そのような女性の、気を許した振る舞いが男を幻滅させたのである。

問 **「さりければ」（8行目）の「さ」は、どのようなことを指しているか。**

答 行かずなりにけり。

補 「さ」は指示語。ここでは、直前の男の行動を指す。

問 **「男」はどこに住んでいるのか。**

答 大和

補 「大和人」という表現から分かる。また、高安の女が見ている方向（生駒山）からも推測できる。

問 **「君来むと」（12行目）の歌は、誰のどのような気持ちを表しているか。**

一途さは、男に他に通う所ができても失われていなかった。男にもそれが感じられたのだろう。なお、類歌に「わたの底沖つ白浪龍田山いつか越えなむ妹があたり見む」（「万葉集」巻二）「玉勝間島熊山の夕暮れにひとりか君が山道越ゆらむ」（「万葉集」巻十二）がある。

5かなしと思ひて　「かなし」は、切ないほどに心を打たれ、涙が出るような感じを言う語。①「愛し」、②「悲し、哀し」の両様の使い方がある。ここは①。

6心にくくもつくりけれ　「奥ゆかしく身繕っていたが」。係助詞「こそ」を受けた已然形が、そのまま下に続く時は逆接の意味になる。

7手づから　「自分の手で」。待女などに給仕をさせず自ら行うのは、慎みを忘れたはしたない行いとされた。

7飯匙　飯を器に盛るための杓子（しゃくし）。しゃもじ。

7笥子の器物　「笥子」は飯を盛る器。笥子の用途の容器という意。

7心憂がりて　嫌になって。

8さりければ　そうであったので。「さありければ」のつづまった形。「さ」は「行かずなりにけり」を受ける。

答　高安の女の、来ない男を恋いこがれて待つ気持ち。

補　前の歌に続いて、高安の女の、男に対する思いが詠まれている。

問　**「筒井筒」の段において、結局、男が河内へ行かなくなった理由を二つ答えなさい。**

答　・大和の女の、ひたすら夫の身を案じるひたむきな愛情に心打たれたから。　・高安の女の、奥ゆかしさを忘れたはしたない振る舞いに幻滅し、嫌になったから。

8大和　現在の奈良県。男が住んでいる所。

8見やりて　「見やる」は、遠くの方に視線を注ぐこと。

9見つつををらむ　「見つつ」の下の「を」は強意の間投助詞で、「をら」はラ変動詞「居(を)り」の未然形。

9生駒山　奈良県（大和）生駒市の西方と大阪府（河内）東大阪市との境にある山。

9な隠しそ　「隠してくれるな」。「な…そ」で禁止を表す。懇願のニュアンス。

10来む　本来「行かむ」というところを女の立場から表現したもの。

12頼まぬものの　「当てにしないけれども」。「頼む」はマ行四段動詞で「頼りにする、当てにする」の意。「ものの」は逆接の接続助詞。

12恋ひつつぞ経る　「恋し続けて暮らしている」。「つつ」は継続の接続助詞。「経(ふ)る」は下二段動詞「経」の連体形で、「ぞ」の結び。

鑑賞

「筒井筒」は幼い恋の代名詞としてよく知られる。また、「たけくらべ」は樋口一葉が小説の題に用いた。男も女もお互いにただ一人を想い合って、全く他に心を分けることなく、ついに初志を遂げる。清々しく好ましい話である。だが、彼らの障害は結婚までのものだけではなかった。「女、親なく、頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、…行き通ふ所出で来にけり。」とは、貴族社会では、生活は妻の実家で世話をする慣習があったから、女の親が世を去ると、途端に生活が苦しくなる。彼らの愛は過酷な現実の前に光を失って、男は援助者を他に求めることになる。そして、そこからがこの物語の眼目である。

新しい女のもとへ通う夫を、筒井筒の妻は、「悪しと思へる気色もなくて」送り出す。妻が自分の外出に少しも恨みがましい態度を取らないのは、もしかしたら、留守を待って他の男を家に入れるつもりだからではないのか。男はそう疑ったが、事実は全く違っていた。妻は夫を送り出すと、夫が側にいるときと同じように身なりを整え、化粧をする。そして物思いにとらわれた妻の口から漏れた歌は、ただひたすらに自分（夫）の身を案じるものであった。「限りなくかなし」と男は思う。妻のいとしさ、自分の低劣な憶測、そうしてかくあらしめた過去、そういった思いが一斉に男をとらえ、万感胸に迫るというのであろう。ところで、このぞき見た妻の様子について、「古今和歌集」の左注では、「夜ふくるまで琴をかきならしつつ、うちなげきて、この歌を詠みて寝にければ」とある。これだと、孤閨を嘆く妻の様子をかなりの時間、夫は見つめていたことになる。さらに、詠み比べ教材の「大和物語」の一四九段「沖つ白浪」（六七頁）では、

月のいといみじうおもしろきに、頭かいけづりなどしてをり。夜更くるまで寝ず、いといたううち嘆きてながめければ、人待つなめりと見るに、使ふ人の前なりけるに言ひける。

とあって、「風吹けば」の歌が置かれている。これでは、妻の化粧を、夫は、別の男を待つためと、いっそう疑いを強くして見ていたことになる。しかも彼は歌によって妻の真情を知った後も、なおも監視を続けるのであるから、妻が嫉妬をしないという事実を、よほど信じかねていたに違いないが、それは実は「大和物語」の作者自身の疑問の反映であったらしい。この後には、妻が胸の上に据えた金椀（かなまり）の水が嫉妬の炎でたぎるという情景を加えている。快くと見えたのは表面を取り繕っていたに過ぎず、それだけ思いは強く内向していたというのである。ここには女が嫉妬しないなど全く考えられないとする作者の主張が表れていよう。こういうものと比較するとき、「伊勢物語」の純愛の清さ、みやびさはいっそう身に染みるように思われる。女の歌によって男の心が戻ったと言う、歌徳説話の系譜に属する話である。

この後高安（河内）の女の方は、身なりを整えて夫を待った大和の女とは対照的に、自ら食事をよそうという品のない行為によって男の愛情を失う。こちらも大和の女同様、歌を詠むことで多少男の気を引きはするが、それでもそのうち顧みられなくなってしまう。これは、「伊勢物語」の作者が「みやび」という点を重要視していることを表していて、歌のみでなく平素の心がけが大切であることも示していると言える。

コラム　『伊勢物語』の主人公は本当に「男」なのか？

『伊勢物語』は「在原業平をモデルとした「男」が主人公とされる歌物語」だと解説することが多い。それ自体が間違いではないし、極めて穏当な説明だといえよう。一方で、「男」と多様な贈答歌を交わし、物語に様々な表情を与える「女」たちの位相について、私たちは授業の中でどのように説明すればよいのだろうか。ここでは、「筒井筒」に登場する女性たちの位相について考えてみたい。

授業後に生徒に率直な感想を聞いてみると、「高安の女がかわいそうだ」という声を聞くことが多い。前半で展開される男女の淡い恋の物語から一転して、後半では「男」に翻弄される「女」たちの心情のうねりが描かれており、特に「男」の都合で一方的に捨てられる「高安の女」に対する同情は、この教材の読解を通じて最も強烈に生成する感情なのかもしれない。

ここで特記したいのは、作品の主眼が「男」を主人公とした物語ではなく、愛執にとらわれた「女」の物語に転移していく過程についてである。鈴木日出男氏は「時間の経過による風化作用にさらされがちな男と女の関係が、特に女たちの側から、その堪えがたい心情が表現されている」と述べ、さらに「歌をはじめに一首しか詠んでいない男の存在は、物語全体の主題からはやがて後退してしまっているのである」と指摘している（『伊勢物語評解』二〇一三年、筑摩書房）。研究2における問題提起も、女に愛想を尽かした「男」の話から、捨てられる「女」の話へと物語の比重が移っていることに着目した課題であった。

ここで、一歩踏み込んだ話題として、「妻問婚」などの当時の習俗について生徒に紹介するのも面白いだろう。特に、「夫が妻の家に通うことで婚姻関係が成立していた当時の習俗では、実は女が家や財産を相続していて、経済的には主導権を握っていた一面もある」という点に重点を置いて説明してみてはどうだろうか。生徒達は「高安の女」に対して、男に翻弄されたみじめな女という印象を抱いていたかもしれないが、実際には、当時の女性達は世間を生き抜いていくのに十分な力を持ち合わせていたのである。

恐らく、この物語で描かれているのは、男に翻弄される女性達のみじめな姿ではない。むしろ、時の流れによってうつろう恋の諸相を、「女」の視点に寄り添いながら描こうとする物語のあり方にこそ着目すべきなのではないだろうか。時の流れが人の心を変容させていく恋のはかなさ。男との関係を断ち切れない愛執のすさまじさ。一人の女の悲しみを物語の新たな主題に据えてゆくことの意味について、鈴木氏は前掲書の中で繰り返し指摘されている。

『伊勢物語』は、徹頭徹尾「男」の物語としてあり続けるのではなく、「男」の物語の周辺の多様な人間模様を多元的な視点から描き出そうとするところに、一つの大きな魅力があると考えられるのである。

（小林　俊洋）